

東方予知夢伝

鏡餅

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「この町を出る。」そう茶髪の癖毛がある男の子に言うのは、東風谷早苗。

彼女は、幻想入りをしてしまうが、それを追う男の子の物語。

目次

洗と早苗

第一話 それぞれの思い

1

第二話 二人は

6

第三話 おわかれ

13

洗と早苗

第一話 それぞれの思い

「この町から、出て行く?」

そう、緑色の長い髪をした女の子に尋ねる男の子は、

夜行 洗《やこう こう》。

彼は高校一年生になったばかりだ。

「うん…ごめんね洗ちゃん…」

そうしよんぼりとした顔で、茶色の髪をして癖毛のある男の子に謝

る女の子は、東風谷 早苗《こちや さなえ》

彼女もまた、高校一年生になったばかりだ。

「いや、そんなしよんぼりしなくてもいいけど…何かあったのか?」

洗はそう言いながら、早苗の顔を覗き込む。

「洗ちゃんには、もう会えないかもしれない…」

早苗は、そう言うと洗に見られないように顔をそっと下げる。

すると、洗は早苗の頬を優しく引っ張って言った。

「なくに、しんみりしてんだよ。いつものお前らしくないぞ。」

洗はそう言うが、彼の顔からは何処か悲しげな表情が読み取れた。

「洗ちゃんだって嫌なくせに…」

早苗は、少しむすっとすると、そっぽを向いた。

そんな早苗に洗は言う。

「ああ、もちろんいなくなつて欲しくはないよ。幼馴染だしな。

でも、俺は、早苗の意思を尊重したいからな。」

洗は笑顔でそう言うと、身支度を始めた。

早苗はそれを見てどうしたのだろう?と 思うが、そんな事を気に

しないように洗は言った。

「さくつてと、明日から出るんだよな？じゃあ最後の日ぐらい早苗の家に泊まらせてもらうか。」

「え!?ちよつと待って！な、何でそう言うことになるの?」

「最後だろ?何だ?見られたくないものでもあったか?」

「いや、別にないけど。」

早苗はそれだけ言うと、心配そうに聞く。

「本当に... いいの?」

「ああ。最後だからな...」

洗は分かっていたかのように、少しだけ寂しく言うと、一週間前の夢のことを思い出していた。

夢の中でも、早苗に別れを告げられたのだ。
会えない。と。

行くぞ。洗はそう言うと、早苗の手を引つ張り、玄関を開ける。

そんな洗に早苗は少しだけ、嬉しさを抱いていた。

洗の手は、暖かくなにより優しさを感じられる。

そんな手にもつと触れていたと思う早苗。

そんな事をしてる間にも時間は過ぎていた。

~~~~~

## 東風谷 宅

「つて言っても親いないから入るの楽だよな。」

洗はそう言いながら、お邪魔しまーす。とだけ言った。

早苗と洗は昔、親を事故で亡くしてから二人で高校生まで支え合っ

て来た。

周りからは、付き合ってるんじゃない？などの噂はあったが、洗にそんな気はなく、兄妹みたいな感じだった。

「洗ちゃん昼ごはん作ろっか？」

少しだけ、考え事をしている洗に早苗はそう尋ねる。

洗は顔を上げ、早苗に聞く。

「あれ？早苗って料理できたっけ？」

そんな少し馬鹿にしたような質問に早苗は、少しだけ慌てて言う。

「で、出来ますよ！洗ちゃんよりは上手にできます！」

そう慌てながら言う早苗を見て、少しだけ笑う洗。

この時間が、ずっと続けばいいのに…。そう思いながら二人は料理を作り始めた。

「あ、早苗。これ賞味期限切れてないか？」

「あっそうですね。でも一日前ですし、大丈夫でしょう。」

やっぱり、町を出て行くことは、大分前から考えていたんだな。相談してくれてもいいのに…

洗はそう思いながら、「そうだな。」と言った。

その後も二人は調理をしていき…

「完成!!」

二人はそう言って軽くハイタッチをする。作ったのは、豚汁とお浸しと炊き込みご飯。

昔、運動会の徒競走でもハイタッチをしたな…。と、思い出す洗。  
「それじゃ食べよっか」

早苗はそう言つて洗に炊き込みご飯をよそう。

「はい。」

「ん。」

何処かの夫婦みたいだったが、そんな事はもう当たり前前に近かつたので、何も照れずにテレビをつける洗。

「いただきます。」

ご飯を食べている二人だが、どちらも口を開こうとはしなかつた。部屋に聞こえるのは、テレビ番組の漫才の声だけ。すると、その沈黙を破るかのように、早苗は言う。

「洗ちゃん、あくん」

早苗は、お浸しを箸で搦むと、洗の口に向ける。

流石の洗も、これには少しだけ戸惑い、頬を赤くして言う。

「ばっ、馬鹿、いきなり何言うんだよ。」

「やっぱり洗ちゃんらしいね。でも、ほら あくん。」

少し笑う早苗に、洗は諦めたかのように早苗の出して来た箸に口をつける。

「どう？」

「お、美味しいな…。」

今まで、早苗をそんな風に見ていなかった洗は、少しだけ照れたように顔をそらして言う。

すると、洗もお浸しに箸をつけ、早苗の口にそれを見せる。

「ほら、あ、あくん。」

「あくん。」

早苗はそれを躊躇することも無く、食べると洗の方を少し笑ってみる。

「洗ちゃんもまだまだだね。」  
「何で競ってるんだよ…。」

そう言いながら、昼ごはんを食べる洗と早苗であった。



## 第二話 二人は

「出かけるか。」

洗は、そう言いながら昼ごはんの食器を片付けている。

早苗もその言葉に、ピクツと反応して言う。

「そうだね。洗ちゃん。」

早苗は少し笑ってそう言うと、服の準備をするのか、二階に上がって行った。

洗は、特に準備する物も無いので、暫く大人しく待っていた。

~~~~~

「お待ちせ〜！」

そう言いながら、早苗は階段を下っていく。

が、

急ぎすぎたのか、階段を踏み外してしまう。

「あっ」

そんな早苗の声と同時に早苗の体を背中で受け止める 洗。

「洗ちゃん……」

「ったく、お前は何回この階段を上ってるんだよっ。」

洗はそう言いながら、早苗をおんぶして外に出ようとした。しかし、玄関の扉まで来たところで早苗がそれを制す。

「ちよつ、ストップストップ！」

何だ？とも言いたげな顔で洗は早苗の方を見る。

「いつまで、おんぶしてるんですか!？」

「え？ずっとだけど。」

「下ろして洗ちゃん！」

早苗は少し顔を赤くしながらそう言うと、背中でジタバタ暴れる。

子供か……と、思いながらゆっくりと早苗を下ろす洗。

「それじゃ行くか。」

洗はそう言って、早苗の手を引いた。

「うん。」と、早苗は言いながら洗の手を握るが、二人きりで出掛けるのは当たり前のことだったからだいぶ慣れていた。

暫く人気の少ない、畑の道を通る二人。

「ねえ洗ちゃん。」

「んー何だ？」

「どこ行くの？」

「さあね」

「教えてよ！」

そう言いながらむすつとする早苗。

そんな早苗を見ながら、笑う洗。

暫くお互い喋らなかったが、洗が口を開く。

「なあ早苗帰るの遅くなるけどいいか？」

「えっいいけど…」

「そっか。」と笑顔で微笑む洗を見て、少し心の中があつたまる早苗。

更に歩いてみると、二人が中学生の時一番行っていたゲームセンターが見えた。

「まずここだな。」

洗はそう言つて、大きくもなく小さくも無い普通のゲームセンターに入つていった。

~~~~~

「洗ちゃん、あれあれ！」

早苗は洗の服の裾をぐいぐい引つ張りながら、ある機械を指差す。その機械はとあるリズムゲームで、最大2人まで出来るゲームだ。流れてくる色の音符を足元の色に合わせる。と言うよくあるリズムゲーム。

中学生の時、二人はこれを一番やっていた。

「そうだな。アレやるか。」

洗は、少し乗り気でそれに賛同すると、早速200円を入れた。

~~~~~

「あー楽しかった〜」

早苗はそう言いながら、腕を伸ばす。

「と、言っても俺の2勝だけだな。」

「洗ちゃんに勝てるわけないじゃん!」

早苗はそうツツコミながら、とある方向を見る。

それに気づいた洗が、恐る恐る言う。

「早苗… お前まさか…」

「そう、そのまさかです!」

早苗がそう言って指を指したのは、ホラーFPSゲーム。

3dサングラスを掛けて、中に置いてある銃の形をしたモデルガンで画面のゾンビなどにポインターを合わせて打つゲームだ。

洗は、怖いのがまず苦手なので中学生の時は、出来るだけこれを避けていたが、今日は避けては通れない。

「分かったよ。」

洗は、半諦め状態でそう言うと、そのゲームが出来る仕切りを越え

た。

「わっ！ちょっと待って、早苗俺の方めっちゃ来てるんだけど！」

「それは、洗ちゃんのプレイングスキルが無いからですよ！」

「プレイングスキル？ってヤバイ弾もなくなった！」

「ほら、その机に置いてありますよ！」

洗と、早苗はそうワーワー楽しく言い合いながらゲームをしていた。

洗も早苗も、お互い笑顔は絶えなかった。

くくくく

夕方6:00

日もすっかり暮れてきた頃、洗はある場所に向かおうとしていた。

「んー次はどこ行くの？」

早苗は伸びをしながら、洗に聞く。

洗は少し悲しそうな顔をして言った。

「綺麗な場所。」

そんな洗の言葉に、早苗は考える仕草をとる。

「綺麗な………場所？」

そんな事を呟いている間に『最後』の目的の場所に二人はつく。

「ほら、ここだよ。」

洗は笑顔でそう言い、この県内最大のタワーを指差す。

そこでは、今日限定のイルミネーションの祭りが行われており、タワーも良く光っていた。

「つわあ、綺麗。」

早苗は少し言葉に詰まりながら、そう言った。

別れの時間が近い……そう感じているのか、早苗は口を自分から開こうとはしなかった。

「ほら、あそこ空いてるから座るぞ。」

洗が早苗の手を引っ張って、とあるベンチを指差した。

その見晴らしはとても良さそうで、何故誰も座っていないのか不思議なぐらいだった。

「そうだね、洗ちゃん。」

二人がそのベンチに座って、お互いに今日の事について、触れ合っていた時足元に置いてあった、小さい飾りまで光をだしタワー圏内が一気にライトアップされる。

「っ!？」

早苗は少し息を飲み、驚いたような表情を見せる。
そして、声を押し殺して泣いた。

そんな早苗を見て、洗は少しだけ焦るが自分も見ていると悲しくなってくるので、優しく早苗を抱きしめる。

そして、言う。

「今日は、楽しかったな。『また』行こうな。」

そんな洗の言葉に早苗は何か息を詰まらせながら言った。

「っ…う…ん。」

ライトは二人を照らした状態でずっとずっと光り続けていた。

第3話 おわかれ

「それじゃあ出て行くね。」

早苗は暗くなった部屋で、洗の顔をじっと見つめて言う。
既に時計の短針は、2を過ぎており深夜だった。

洗は目を閉じ寝息を立てて、静かに寝ている。

「じゃあね。」

湿っぽいのをできるだけ避けたかった彼女は、出来るだけ洗との思
い出を思い出さずに音を立てずに部屋を出ると、階段を駆け下り玄関
の前まで来る。

「お別れかあ、ごめんね洗ちゃん……」

玄関の上のLED照明の明かりを見ながら、彼女はボソツと呟い
た。

やはり、最後の挨拶を言わずに行ってしまうのは気が引けたのだろ
う。

彼女は玄関の扉をグツと掴み扉を開ける。

が、

その手は、誰かの手によって阻まれてしまった。

そつと後ろを振り向くとそこには、寝ていたはずの洗が立っていた。

「えっ？洗ちゃん？」

少しだけ驚いた彼女は、玄関の扉をゆっくり閉めると、彼の方に顔を向ける。

湿っぽいのは嫌いなのに……彼女はそう思いながら彼の顔をジッと見た。

暗闇のせいであまり見えないが。

暫くお互い何も喋らなかったが、洗が口を開いた。

「これ、買って来てたんだあげるよ。」

洗はそう言って赤色の花と、緑色のカエルの髪飾りが入った箱をあげる。

早苗はゆつくりと口を開く。

「彼岸花……と、髪飾り？」

早苗は暗闇の中まじまじとそれを眺めると、髪飾りを髪につけ花をそっと胸のポケットに刺した。

そして、洸の方を見て言う。

「あ、ありがとう。」

洸は軽く頷くと、早苗の背中を押す。

そして、

「行ってらっしゃい、『また』、会おうな。」

『また』そんな言葉に少しだけ目頭を熱くしてしまうが、早苗は振り向いて、出来るだけ笑顔で言った。

「うん、『また』ね。」

早苗は洸に気づかれないように声を押し殺して、涙を流し玄関の扉を開けた。

キキキ……と少しだけ古い音がして、ゆつくりと扉が開く。

満月の光が少しだけ部屋の中に入り、早苗の頬を伝った涙が白く光る。

そんな涙を洸は気にせず、目をギュツと瞑り、早苗の少しだけおぼ

つかないような足取りを押し背中を最後まで見届けた。

背中が見えなくなっても、日が開けて来ても早苗の行った方を見続けた。

そしてもう見えない早苗に対してゆっくりと洗は呟く。

「なあ、早苗知ってるか？彼岸花の花言葉は、

『また会う日を楽しみに』なんだってよ。」

洗は目の淵に涙をためてそう言った。

登って来る朝日が彼を照らし、またその涙を照らした。

彼は様々な思い出を思い出し、外なものにも関わらずただ無数の涙の粒を流していた。

これが、彼の幻想郷入りするきつかけの前置きである。